日本歯科医史学会々誌・第21巻
第2号通巻79号・平成7年12月

カナダに於ける歯科教育の歴史
第 7 報
—1900～1904年間の歯科及び歯科教育の貢献者像—*1

尾島光栄*2　Kenji Kenneth SHIMIZU*3

要旨：カナダは世界各地からの移民で大草原州の時代を迎え，Gold rush に動揺した西海岸地域の人口が動揺のはてに激減した．

Montreal の巨星 William George Beers (JSDH, 20 (3), Fig. 2) が59歳で逝去した．

Bishop's College は教育効果と諸問題から McGill, Laval として分離，Quebec Board との正式な教育に関する決議により再出発した．

1902年の年次大会は多数の出席者で盛り上がり，Scientific program と Business session の2部門で強力に進められ，後者の session からは国家規模の2組織が誕生した．

南アフリカ戦争にカナダから渡海，参戦し，2名の歯科医が派遣され，その後軍事歯科委員会が形成され初の歯科軍医の任命があった．

1900～1904年間に活躍した歯科貢献者等を第1～6報[1~6]に引き続いて紹介し，本間[7]から引用した歯科・社会・文化史を参考に記載した．

During the early years of the new century, a great many immigrants from many country of the world came to Canada.

This meant the coming of age the Prairie provinces. But gold rush on the Pacific slop went out and began to decrease population gradually.

Canadian dentistry suffered one of its most grievous losses, when big-timer William George Beers (JSDH 20 (3), Fig. 2) of Montreal died at fifty-nine years of age.

It is evident that a good deal of dissatisfaction arose at the school respecting the relationship with the University of Bishop's College. The effort to teach in both French and English also had not proven very successful.

The attendance at this annual meeting in 1902 was remarkable. Both the lenghty scientific program and the business sessions indicated great care in preparation.

Canadians had crossed the ocean to fight in The South African War. The military dentistry provision be made in the militia for the appointment of dental surgeons to the forces.

Introductions are made of the dental contributors during the period from 1900 to 1904 continued from No. 1～6[1~6].

At the same time, authors carried a chronological table of Dentistry・Society・Culture cited from Honma[7]

*1 History of Dental Education in Canada No. 7
—Contributors of the Dentistry and Dental Education during the Period from 1900 to 1904—

*2 Koei Ojima, The Nippon Dental University, School of Dentistry at Tokyo, Department of Physiology　日本歯科大学歯学部，生理学教室

*3 Kenji Kenneth Shimizu, The University of British Columbia, Faculty of Dentistry, Department of Clinical Dental Sciences, Division of Prosthodontics and Department of Oral Medical and Surgical Sciences　ブリティシュ・コロンビア大学歯学部臨床歯学部，補綴学部門，口腔医学・外科学部門

for reference.
Key words：歯科学 Dentistry, 歯科教育歴史 History of Dental Education, 歯科教育貢献者 Contributor of Dental Education

1．はじめに

この年代は連邦政府の誘致宣伝，自作農地の自由化，通行の補助等の結果，世界各地からの約200万人の移民がカナダにやって来て，大草原州の時代を到来させて Saskatchewan, Alberta を独立させたが，カナダ西海岸地域の Gold rush が漸く下火になって人口の減少を招く事態になる．

Canadian dentistry は Montreal の巨星 William George Beers (JSDH, 20 (3), Fig. 2) が59歳で逝去という最も悲しき損失に遭遇する．

Bishop's College には多くの問題が発生し，French と English 両面での教育の効果が成功せず，1904年 Quebec Board との正式な教育の審議の機会をもった．

1902年の年次大会には多数の出席者で盛り上がり，Scientific program と Business session の2部門で強力に会議が進められた．Business session からは2つの新しい国家的歯科組織として Canadian Dental Association と Dominion Dental Council が満場一致で創立され，討議と小改正の後に倫理問題と共に規則と細則が採択された．

南アフリカ戦争にカナダからの渡海参戦があり，軍事歯科委員会が発足し歯科軍医の初任命が1904年7月2日に決定した．

歯科助手の雇用と年季奉公が問題化して，商業歯科技工所の開設，歯科医療機関の不良広告宣伝が浮上し法的規制が行われた．

この激動する1900～1904年間に活躍した諸人物像について，第1～6報[1~6]に引き続いて紹介し，本間[7]の歯学•社会•文化史を参考に掲載する．また Gullett[8] の100～112頁を参考にした（**Fig. 1**）．

2．主な登場人物―登場順―

今回の第7報に登場する主な人物名は次の William George Beers (JSDH, 20(3), Fig. 2), W. K. McNaught, Albert E. Webster, Stephen Globensky, J. G. Globensky, William J. Giles, Peter Brown, John H. Samuel, Eudore Dubeau, George Lynch Cameron, George S. Cameron, Frank Woodbury, S. W. McInnis, F. A. Godsoe, J. S. Bagnall, W. D. Cowan, R. Nash, F. A. Stevenson, J. B. Willmott, T. J. Jone, David Henry Bared, Eugene Lemieux, Ira Bower, Harry R. Abbott, C. H. Juvet, R. R. Dalgleish, G. C. Mathison, John Hunter, Antoine Avaricle, Francis George Berton, Nanette Finlay Clay, A. W. Faulkner, R. E. Sparks 等である．

3．National organization (1900～1904)

人口の増加と景気上昇の経済状態は各種職業の進歩に貢献する原則的な2大要素である．

今世紀開始と同時に連邦政府の誘致広告，自作農地の自由化，通行の補助等の結果として，イギリス，ドイツ，北欧バルカン諸国民，ロシア，合衆国から約200万人の移民が Canada へと大挙して移住，移植して来た．

この事態は大草原州の時代到来を意味して，北西準州の南部からは1905年Saskatchewan と Alberta の2つの州が創立され，Alberta では多数の Calgary 市民の期待も空しく首都には Edmonton が決定され，Saskatchewan には2年の議論の後に Regina に議会ビルが建立する決議が行われた．

これらの Canada 各地の活発な政治形態の組織化は，1949年に10番目の州として Newfoundland を誕生させ，Canada 国内を通じて短期間に人口が50%を過ぎて700万人以上に急増加するという大発展振りであった．

1900年12月26日，Canada Dentistry は Montreal の William George Beers (JSDH, 20 (3), Fig. 2) が59歳で逝去するという最大の悲しき損失の事態に遭遇することになった．

彼の活躍は職域の範囲を超越して，愛国者，スポーツマン，その他の種々の問題にも良き運動の

西暦	和暦	歯　学　史	社会・文化史
1900	明治 33	高山歯科医学院，東京歯科医学院と改称す（東京歯科大学の前身） 万国歯科医会議は万国歯科医連盟（Fédération Dentaire Internationale）として発足（略称 F.D.I.） パブロフ：条件反射機構の説明	○1900：ド・フリース（H. De Vries, オランダ），メンデルの法則の再発見
1901	明治 34	プライス：X線の歯科的応用 高峰譲吉：アドレナリンの抽出 ランドシュタイナー：血液型の発見 レントゲン，ノーベル賞を受く ベーリング(血清療法の発見)，ノーベル賞を受く	○1901：日本赤十字社創立
1903	明治 36	石原　久，東京帝大医科大学にて歯科学講座を担当す 医術開業試験，内務省より文部省に移管さる	○1903：ライト兄弟，飛行機ではじめて飛ぶ
1904	明治 37	モラーウィッツ：血液凝固学説の発表 パブロフ，「消化液の分泌と神経系統の関係」によりノーベル賞を受く 吉岡弥生，東京女医学校を創設（東京女子医大の前身）	○1904：日露戦争（明治 38．9．5．講和）
1905	明治 38	アショフ，田原　淳は心臓刺激伝導系ヒス筋束に田原氏結節を発見す コッホ，ノーベル賞を受く	

Fig. 1　1900～1904 年の日本近世歯学史・社会・文化史年表
（本間邦則著：歯学史概説 111 頁より抜粋）

支持者として知名であったので，当時の新聞は市，州のみならず国を越えての広い視野の彼を絶賛する記事で埋め尽くされた．

W. K. McNaught はその著書に“偉大なる人物：Beers は何時までもその出現と人格の称賛を讃え続けられる人”と記載している．

Montreal にある巨大な正方形の花崗岩の Mount Royal Cementery には，この Canadian の巨星の歯科およびその他数々の偉大な業績が刻印されて永遠に保存されている．

彼の他の歯科に関する貢献の一つとして，Ontario の Royal College of Dental Surgeon への歯科関連図書の寄贈があり，これらはこの時代では Canada 最大の図書数に該当し，約 400 巻にもなり，当時は Toronto School に図書館として建立されていたが，現在は Toronto 大学歯学部が所有管理し，大規模な図書蒐集の中核となって保存されている．

Beers の逝去によって“Dominion Dental Journal”の編集者の地位が空席になったが，幸いにも雑誌の将来のために Toronto の若人 Albert E. Webster が編集者に指名され，その地位を 35 年保持して雑誌のために貢献した．

Beers は永年 Montreal School の学長を務め，経営と教育に敏腕を振い貢献したが，1897 年彼の辞職の後，Stephen Globensky が就任するも 1 年少々で辞し，弟の J. G. Globensky に 1 時期を託したが，1900～1901 年に掛けて William J. Giles が次の学長に指名され，その後，Montreal の卓越した歯科医 Peter Brown が 1902 年に学長に指名され，1905 年の学校の閉鎖まで務め上げた．

Bishop's College には多くの問題が発生し，特に French と English の両方での教育の効果は成功とは言えなかったので，Quebec Board は 1904 年に McGill と Laval 両大学と新しく審議の機会を持ち，正式に歯科教育を行う契約を交わし，Montreal の Bishop's Medical college は廃校し，1905 年 McGill University のMedical Faculty と合併した．これに併い Quebec Board は Quebec 州の Dental College を廃止した．

Quebec Board は大学での正規の教育のために臨床歯科の教育の場所を探し始めると共に，1906 年 McGill の学生の歯科臨床は Montreal Gen-

eral Hospital へ移動し，その病院は現在も臨床教育を行っている．

Laval の学生の教育は，その設備が $450 で l'Université Lavel へ売却される 1909 年まで存続したが，何れにしても，1906 年には McGill は歯科の学生を完全支配し，1909 年には Laval の学生をも収容した．

McGill の歯科の臨床は Montreal General Hospital の死体公示所の大施設の跡地を使用した．と言うのは，この時代には Vaccination が Montreal 市民全体に及ばず，大規模な天然痘の流行の悲劇があったからである．

優れた若き Montreal の歯科医，John H. Samuel の死は Vaccination の採用の遅れで，公衆衛生の立ち遅れを意味していた．

Laval 大学では歯科学校は Eudore Dubeau を校長とする大学の Division となり，彼の地位は約 4 年間保持され，McGill 大学では歯科学校は医学部の Department となった．

また，両大学は 1903 年に Royal College of Dental Surgeon で採用された修行期間を改正して 4 年間にし，Laval 大学は最初から D. D. S. の学位を授与したが，McGill 大学はまず Master of Dental Surgeon (M. D. S.) を授与し，1908 年には D. D. S の学位を授与した．

George L. Cameron と George S. Cameron は共に Bishop's での 2 年の課程を終了していたが，学校の閉鎖によって McGill へ移るが，G. L. Cameron は 1 年から忠実に再開始して卒業し，永年にわたり Saskatchewan の Swift Current で臨床に従事し優れた歯科医となり，一方の G. S. Cameron は McGill の条件を拒絶して U. S. A. に行き教育を終えて Montreal へ帰り，免許を取得後に McGill 大学での教授に招かれ，永年にわたり市でも有名な歯科医として活躍した．

Nova Scotia Dental Body の書記であった Halifax の Frank Woodbury は 1893 年に州の Dental Board 間の相互交流の運動を起こし，Nova Scotia Dental Association を満場一致で発足させる目的を果たした．

その後の 10 年間は国家基盤に立った歯科組織に対する熱烈な運動が各州内で盛り上がり，Brandon の S. W. McInnis, Saint John の F. A. Godsoe, Halifax の Frank Woodbury, Charlottetown の J. S. Bagnall, Regina の W. D. Cowan, Victoria の R. Nash, Montreal の F. A. Stevenson, Toronto の J. B. Willmott 等は最も協力な促進者のメンバーであった[9]．

F. A. Stevenson は当時の Quebec Association の議長で著名な歯科医でもあった．

彼は 1888 年に Havard University Dental School を卒業し，1934 年の逝去まで Montreal で診療に従事したが，その間に McGill school の教育 staff や各種の歯科委員を可能な限り務め，Quebec Association の満場一致の支持を得て彼と Dubeau は会議を組織し，その後彼はその議長となった．

1902 年のこの会議は多数の出席者で盛り上がり，この時代の Canada 全国の歯科医の 19%に相当する 344 名の出席があり，全州と North-West Territory からの出席による会議は 3 日間にわたり非常な熱気の連続であった．

Scientific program と Business sessions の 2 部門に於いて会議が進められ，特に前者に於いては，公衆に対する Dental Health Education が卓越したテーマの一つで，Ontario と Nova Scotia はこの教育プログラムを推し進め，他の州に於いてもその経験を基に次々と開始された．

後者からは 2 つの新しい国家的な歯科組織として，Canada Dental Association とDominion Dental Council が創立され，また，法的な規制と倫理問題が大きく取り上げられ，特に，参加出来なかった British Columbia の議長 T. J. Jone も称賛の意見を述べている．

この会議の終了する数週間前に南アフリカ戦争 (1899～1902) が終焉したが，この戦争には約 7,300 人ものカナダ人が渡海，参戦し，彼等が戦場に到着後に多数の人が歯牙の疾患に罹患するという事故が本国に伝えられた．

その対策のために 2 名の歯科医：Ottawa の David Henry Bared と Montreal の Eugene Lemieux が任命され，1900 年軍の医師として南

アフリカへ派遣されたが，彼らは自分達の諸設備，器具を用意して出掛けて行き，1902年5月迄，主に抜歯や応急処置などの治療に従事し，Bared と Lemieux は歯科の軍医として軍隊で活躍する最初のカナダ人となった[10].

1900年，Eastern Ontario Dental Association は強力な決議によって軍隊歯科の必要性を計画，立案し，他の歯科組織と共に当局に対して決議を催促した.

Ottawa の歯科医 Ira Bower はこの運動に対し最も活動的で，新しい国内会議の議長になり，この軍事歯科委員会は軍の規定に基づく歯科医の採用と奉仕の限界を決議した.

Ira Bower の努力と固執の継続によって，1904年7月2日には軍事歯科の独立部門が形成され，最初の歯科軍医の任命が行われた.

Canada は国土が広大で地理的な条件と財政上の問題が国家機構を左右する障害であった．約1,310名の歯科医が4,000マイル以上の薄いリボン状の地帯に分散している状況から，Canadian Dental Association の全体の会議は2年に一度が妥当であるとされていたが，1904年9月，Toronto で第二回目の会議が J. B. Willmott 議長のもとに開催，招集された[11].

Dominion Dental Council の組織化のため1904年と1905年の両年にわたり B.C. 州を除く全州の委員会の代理人会議が開催され，Halifax の Frank Woodbury 議長を中心とした組織委員会が多くの懸案，準備を整理し，1905年の Toronto 会議の席で Council の機能，目的，規則基準，その他が討議され幾つかの訂正が行われた後に採用された.

この正式な Council は London の Harry R. Abbott が初代議長に選出され，Regina の W. D. Cowan が書記になり，1906年には最初の試験が実施され Ottawa の C. H. Juvet がDominion Dental Council Certificate の第一号の登録証の受取人となった.

この Council は55年間も参加全州の支持を獲得して継続し，その後 National Dental Examinating Board として継承された.

Quebec は何時も同意に締結しなかったが，数年間は会議へ代理人を参加させた.

British Columbia は短期間だけ参加した．Council Certificate の支持者等は相互の同意によって診療に従事する者の免許を登録させて資格を与え，資格の統一化に向かった.

1900年1月，Manitoba Dental Association の年次大会に於いて Western Canada Dental Society (W. C. D. S.) を組織する決議が行われ，新 W. C. D. S. の最初の会議が翌年の7月に Winnipeg で開催され，Winnipeg の R. R. Dalgleish が議長に，G. C. Mathison が書記に選出され，幾多の困難が在ったとはいえ全体としては成功の内に進行し，Manitoba, Saskatchewan, Alberta 州の歯科医等は2年毎の会議に参加して会議を盛り上げた.

Toronto と Montreal の両州で歯科助手の雇用問題と歯科技工所の問題が発生した.

歯科助手は歯科の年季奉公の後に歯科医として独立する希望の過程であるが，実際には技工の手助けが主体で，診療のための知識と技術の教授と訓練は二の次であったので，何時しか彼等は技工で身を立てる職業を選択するべく技工所の独立を考えるにいたった.

当時は技工所は歯科診療所の必要部分とし不可分な重要性を持って考えられていたので，診療所の外に技工所を分離し設立することは相当な冒険と妨害があった.

しかし，1905年には商業歯科技工所が立派に市中に設立され，その年の Domonion Dental Journal の編集者の一人は“一人の歯科医として給料によって働く職業よりも，技工所を開業して働く方が割がいい”と記載して経済基盤の変換の事実を確認している.

ヨーロッパ諸国では歯科は外科の一部門と考えられた時代に，England の John Hunter は Baltimore に最初の歯科学校を設立した時，医学校で歯科学を教える試みをしたが，歯科の臨床は設備，器械，材料，技術体系等の点から医学校では教えることが出来ないと強調し，この考えは北アメリカ大陸では討議の結果から，歯科のカリキュラムに歯科独自の生物学的内容を増やすことで医科から独立する教育機関となる由来となっ

た.

人々の関心も高まり歯科に対する興味は増加して，学校への入学申し込み数も増加し，卒業者の増加は歯科医同志，有資格者と偽医者，評判の高い医者と藪医者の職業上の競争状態を招き，新聞広告，チラシ，カード等による宣伝競争の時代へと突入した.

1899年のMontreal新聞の大きな広告には“完全に適合した人工歯は＄4.85，金充塡は＄1.00”と，Boston Dental Parloursも新聞に広告を掲載し，Toronto では Toronto Painless Dental Parlours と Department Store Dentistry が出版物になった.

Montreal では Paquette という名の一人の簿記係が“Institute Dentaire Franco-American”を設立し，歯科医を雇い，共同で臨床を行い，低い料金で奉仕を行う有様となった.

この事態は Quebec Association が法廷行動によって，これらの無秩序組織を解散させる事で一時的に決着に成功したが，Dental Acts に対する新しい種々の問題とその訂正が求められ，“一つのドアーが閉められると，他のドアーが幾つかの器用な計画で開けられる”と言った戦いがその後20年以上も続いた.

Pacific slope 各地域での最後にして最大のGold rush は Yukon River 支流の Klondike での金鉱の発見に始まった.

世界中のあらゆる国から輸送と交通の困難を克服して，その地域に急速に人々が遣って来たので，1897年には Dawson City の人口が1,500名であったのが，その年度の後半には25,000名に急増加したのである.

これらの新参者の中には幾人かの歯科医達も居合わせたが，彼等の目的は本質的には歯科の診療よりもむしろ他の手段での富を求めての到来であったのは当然であった.

それらの中で最初の歯科診療所を実際に開設したのは La Société Dentaire de Paris の会員でもあった Antoine Avaricle で，輸送と交通が便利で人の動向が盛んな場所 Comey Bar に診療所を開設したが，その後1900年頃になり主な Gold rush も過ぎて衰退が始まり，収入の見積りも低下傾向になり始めたのでAvaricle は Dawson から南へ35マイルの地に診療所を移し，Francis George Berton が彼の年季奉公になるが，その後短期間の後に Avaricle の行方は不明となり，Berton は一時期だけ歯科の奉仕で社会に貢献するべく臨床に携わったが，直に他の職業に転職した.

20年後，巨大な Yukon Territory は全人口が5,000名になり，1930年には Dawson は僅かに1,000名に過ぎない人口にまで激減した.

この空白化の時代の間に，若干の歯科医等がこの地で臨床に従事していたが，驚くべき事にこれらの歯科医の中に一人の婦人歯科医がいた．彼女の名は Nanette Finlay Clay で，1911年に名簿に記載された.

最後の有資格歯科医 A. W. Faulkner が1925年に Dawson を去ってからは，F. G. Berton が彼の設備を運びこんで他の歯科医が出現するまで臨床を続けた.

また，この時代の Yukonでの診療に従事した歯科医は，2～3の学問的調査以外は全てがカナダの卒業生ではなかった.

カナダの歯科学は高揚する認識の基に成熟の時期に達しつつあり，将来に輝きが現れていた．1904年の Ontario Dental Society の年次大会の議長演説で，Kingston の R. E. Sparks は次の如くのべている.

“私が未来と言う水平線上を見通した時に，現在の我々の職業に真剣に参画する歯科医等の姿は偉大なる可能性の夜明けを見る思いであり，X-Ray，顕微鏡，蛍光鏡，細菌学の発達，電気の紹介，局所疾患に対する全身反応の認識，そしてまた新しい器具，装置の開発と改善は歯科診療時の苦痛に対する予防，診断，診療に驚異を齎し，歯科学の科学的研究や卒業後における臨床での研鑽と探求を志す若人等には有名になり，偉大な人物に成り得る機会が待っている”と[12].

文　献

1) 尾島光栄，K. K. SHIMIZU：カナダに於ける歯科教育の歴史　第1報―ブリティシュ・コロンビア州を中心として―．歯医史 19(3)：103-109，1993.
2) 尾島光栄，K. K. SHIMIZU：カナダに於ける歯科教育の歴史　第2報―歯科及び歯科教育の貢献者像―．歯

医史 20(2)：135-140, 1994.
3) 尾島光栄, K. K. SHIMIZU：カナダに於ける歯科教育の歴史　第3報—1860～1869年間の歯科及び歯科教育の貢献者像—. 歯医史 20(3)：165-170, 1995.
4) 尾島光栄, K. K. SHIMIZU：カナダに於ける歯科教育の歴史　第4報—1870～1879年間の歯科及び歯科教育の貢献者像—. 歯医史 20(3)：171-177, 1995.
5) 尾島光栄, K. K. SHIMIZU：カナダに於ける歯科教育の歴史　第5報—1880～1889年間の歯科及び歯科教育の貢献者像—. 歯医史 20(4)：165-171, 1995.
6) 尾島光栄, K. K. SHIMIZU：カナダに於ける歯科教育の歴史　第6報—1890～1899年間の歯科及び歯科教育の貢献者像—. 歯医史 21(2)：投稿中, 1995.
7) 本間邦則：歯学史概説. ㈱医歯薬出版, 東京, 昭和46年9月, 111頁.
8) Gullett, D. W.：A History of Dentistry in Canada. The Canadian Dental Association by University of Toronto Press, pp. 100-112, 1971.
9) Dominion Dental Journal, Vol. 14, No. 2, March 1902.
10) Dominion Dental Journal, Vol. 16, No. 10, October 1904.
11) Dominion Dental Joural, Vol. 12, No. 1, January 1900.
12) Dominion Dental Journal, Vol. 16, No. 3, March 1904.

著者への連絡先：尾島光栄
〒102 東京都千代田区富士見 1-9-20
日本歯科大学歯学部生理学教室
☎ 03-3261-8311（内）328
FAX 03-3261-3924